

読むことで人生の規範を探求

里草会顧問 福井正樹

私たちの世代は読むための本に飢えていた。それには3つほど原因があると思う。まず小学校に入学した年からひらがなの教科書に変わってしまい、それまでの漢字片仮名混じりの本が時代遅れの陳腐なものになってしまった。次に紙が不足していたので教科書さえ上級生の使ったのを譲ってもらって使用するくらいだから、子供用の本など手に入らなかった。疎開する時に持って行っていたキンダーブックなどカタカナの絵本は、何度も繰り返し見ているのだが、敗戦で規範が変わり戦場の話などに関心は向かない。

小学生の間は大人の本は読んでも理解できない。母は叔父に自分の読んだ後の「リーダーズダイジェスト」を送ってきていたが、山奥の小学生にアメリカの翻訳した雑誌など読みこなせるものでもなかった。挿絵を見る程度だ。近所のうちにも昔の本はあるのだが、墨で塗りつぶしてあったりしてカタカナに親しむこともなかった。

紙不足の時代は相当続くのだが、小学低学年には小学何年生という月刊誌を母が小包で送ってくれていた。それを3回くらい読み返していたので、話の筋などは暗記してしまう。私は読み飽きたら誰かに貸していたようで、社会人になってからのクラス会の時、雑誌を読ませてもらえてうれしかったと言われた。最初は粗末な紙だったが、4年生頃にはグラビアのページもできてきた。

小学生の頃「フランダースの犬」と「家なき子」の単行本を母が送ってくれたことがあった。「おまえは家のない子なんだからよく読め」と言われたが、環境が違い過ぎて感動しても情景は異質に思えた。宮沢賢治の童話はずっと体に入ってくる。母は自分で本を選んだのではなく、母の病院に日曜学校や育児指導などをしている部門があってその人達に相談していたのだろう。それでも「15少年漂流記」や「ロビンソン・クルーソー」など繰り返し読んで筋を覚えている。中学生の頃には少しずつ本が出まわるようになって、未知の世界への新鮮な感じで本を手にしたものだ。

「山並み文庫」と言ったと思うが、村に月1回県の移動図書館のバスが来て、娯楽的な読み物が2冊借りられた。私はただ背表紙を比較して分厚いを選んで借りた。「唐獅子伝奇」という分厚い上下2冊の名前だけ覚えている。中学校には図書館はあったが、亡くなった先生の寄贈したものなど古いものばかりで、全く魅力がなかった。当時役場のひと隅に本を貸し出すところが設けられて、新平家物語が出るごとに争って借りに行った。太閤記や宮本武蔵などもこのころ読んだのであろうか。相当紙の供給も増えてきたのだが、山奥の村にまで好みに合わせて選択できるほどの書籍は届かなかった。

カバのデコレーションをした宣伝車が来て、クイズに答えると子供向きの単行本をくれた。私は答えがよく当たったが、そんな雑学は子供向けの月刊誌から得ていたのであろう。そして読書に真剣になったのは高校入学以降である。下宿仲間の写真にダンテの「神曲」を抱えて文学少年らしくポーズをとったのが残っている。むさぼるように世界文学全

集も日本文学全集も世界戯曲全集も世界偉人伝も読み漁った。私たちは「いかに生きるべきか」とか「人生とは何なのか」を探究せずにはいられなかった世代なのである。これが本を求めた3つ目の理由なのだ。神曲をいくら読んでも登場する多彩な西洋の歴史的人物についての知識がついてゆかない。ゲーテを読んだからと言って、描かれている人物の苦悩や逡巡が素直に自分のものになるわけでもない。

我々よりひと世代上の人達は、軍国少年として価値観が固まっているさなかに敗戦を迎えたので、深い断絶を感じ社会や指導者に拒絶感を抱いた。そして混乱の戦後を生き抜かねばならない現実に対面していた。もちろんそれなりに生きることへの苦悩はかぶさって来ていたのだが、その生き方を提示してくれるような指導者も育っていなかった。戦後いろいろな新興宗教などが現れ、天皇制崩壊で拠り所を失った心を別な権威が吸収していた。左翼から右翼までの政治や社会の思想が飛び交い、東西の冷戦の中で敗戦による挫折やその反省や批判が、知識人の間にも氾濫していたのである。

私たちの世代は其中で何が本当なのか、真実とは何かを必死に求めざるを得なかった。多くの書籍からその主人公の生き方を探るときには共感し自らの人生と重ねようとした。高校生のころからカント以降の哲学者などの論理を読み解こうとするのだが、なかなか納得のいく形は見えてこない。ニーチェが現れて神は死んだということと思えば、キルケゴールなどの実存の神学も現れる。教会に行っても聖書を学んでも私には素直に信仰を持つことはできなかった。サルトルからプラグマティズム、更にマルクスなど新しい思潮を追い求めるものの、自分にとっての確固とした価値感や人生観はつかむことができなかった。

どんな時でも本が傍にないと精神が空白になってしまうようで不安を感じる。今でも外出する時には何冊かの本を持っていないと落ち着かない。北アルプス縦走の時にも、分厚い文学全集の一冊を持って行った。それを見た先輩が「お前山で本を読む間があると思っっているのか」とけなされたが、とにかく松本行き夜行列車の中で本を広げていた。かどが剥げたその本にコマクサがはさまれて残っている。ちょうどいま電車の中で一斉にスマホをいじっているようなもので、時間があれば本を読もうとしていた。

いま書店に行っても当時感動して読み漁り、また友達同士で議論し語り合っていた本などが全くない事に気がついた。「チポ一家の人々」やロマン・ローランの主人公達の生き方を真剣に仲間で論じ合った。日本の文学に登場する主人公は、狭い心象描写でなんとなく暗い心のひだの物語なのに対して、欧米文学は行動が先にあり、より高度で崇高なものや理想を求めて自らを投入しようとする外に向けた戦いがあった。

考えても考えても生き方に結論が出るわけではなかった。哲学も自分の生き方には指示をくれなかった。自分に降りかかってくる周囲からのあらゆる現象に対して、自らも人も欺くことなく投げ返し続けてゆくしかないのが人生だと思うようになった。それが実存的な生き方と言えるのだろうか。結構私の人生は波乱に満ち挫折と苦悩にさいなまれつつも充実していたと感じる。老境にあつて、青春のころに本にまみれながら純粋に生き方を

求めて読書していた日々が懐かしい。